

## 献辞

外池 昇

篠川賢先生は、御存じのように日本古代史の泰斗であられる。古代史といっても比較的古い方の御専門であるが、その業績たるや、先生御自身による別掲の目録のごとく、単著・編著、そして論文等に至るまでまさに枚挙に遑がない。

先生が成城短期大学に専任講師として着任されたのが、昭和五十九年四月であるから、爾来三十七年間、本学で教鞭をとられてきたことになる。この間先生は、助教授から教授に昇進され、平成七年四月には文芸学部（文化史学科）へ移られ、それと同時に大学院文学研究科（日本常民文化専攻）の授業・指導も御担当になった。この度の御退職に至るまで、多くの学生・院生がその聲咳に接し、論文の指導を忝けのうしたのである。

また先生は、何校もの大学に御出講になり、そこで接した学生・院生等とそれを機会として定期的な研究会を持つに至ったと聞き及ぶ。先生の学識・人徳を慕つてのことと推察する。

かく言う私は、先生に初めてお目にかかったのが、文芸学部におられた佐伯有清先生の学士院賞受賞の学園内でのお祝いの会のことであつたと記憶するから、先生が短期大学においてなられたすぐ後のことになる。その後御縁を頂いて私が文芸学部に着任してからは、同じ学科・専攻で日常的に教育・研究、そして学務に励むいわば同僚としてのお付き合いをさせて頂くこととなつた。

それから十余年。この間というのは、先生の御研究にあつてはまさに充実の一言に尽きるものであつて、そのことはやはり別掲の目録によつて明らかである。自分と比較しようなど努勞しいもしないが、先生と同じ環境に居ることができた何年間かを糧として、せめては細くとも方向性だけは過たぬ学問を継続できたらと思う次第である。

文化史学科では、毎年恒例として学生を引率して学科研修旅行を二泊三日で行なう。毎年行先は違ふのだが、宿舎での夕食に先生は御酒を欠かすことがない。その折に先生は、実に幸せそうな表情をお見せになる。私はあまり酒を嗜まないのですくは分からないのだが、先生の豊かで幅の広い学問の秘密はこの辺りにあるのであるうかと推察する。

ともあれ定年までお勤めになられた先生には、ただ、永いこと有難うございました、このような御時世ですから健康には充分お気を付けください、と申し上げたい。そして、後はお任せください、とはとても申せないのではあるが、先生が大学を去られても、なお教育に研究に微力を尽くしたい。